

芥川 仮名書き・口語訳



仮名書き

むかしをとこありけりをんなのえうましかりけるをとしほくてよは
ひわたりけるをからうしてぬすみいてていとくらきにきけりあくた
かはといふかはをぬてゆきればくちのうくにおきたりけるつゆをか
れはなにそとむをとこにとひけるゆくちきおほくよもふけにけれ
はおにあるところともしらてかみやくいとこみしうなりあめもいた
うふりければあはらなるくらにをりはやよもあけなむとおもひつ
ゆみやなくひをおひてとくちにをりはやよもあけなむとおもひつ
ふたりけるにおにはやひとくちにくひてけりあなやといひけれとか
みなるせわきにえきかさりけりやうやうよもあけゆくにみればぬ
てこしをんなもなしあしすりをしてなけともかひなしあしらたまか
なにそとひとのとひしおれひとこにたべてえなましものを

口語訳

- (1)昔、男がいたそうだ。
- (2)女で男がとても妻としてえられそつもな
かつた人を、何年もの間求婚し続けてい
たが、やつとのことで盗み出して、とて
も暗い中を来たそつだ。
- (3)芥川といつ川のほとりを連れて通つて行
つたといふ、女は草の上に降りていた露
を見て、「あれは何かしい。」と男に尋ね
たそうだ。
- (4)行く先の道のりも多く、夜も更けてしま
つたので、鬼がいる所とも知らないで、
雷までもがとてもひゞく鳴り、雨もひゞ
く降つたので、
- (5)荒れた隙間だらけの倉に女を奥に押し入
れて、男は「と胡」を背負つて口にい
~~~~~
- た。男は早く夜が明けてほしいと思い続  
けて座つていた間に、鬼があつという間  
に一口で女を食べてしまつたそつだ。
- (6)「あれえ」と言つたけれど、雷が鳴る  
騒ぎで、男はそのことを聞くことができ  
なかつたそつだ。
- (7)ようやく夜が明けてゆくので、見ると連  
れて来た女がいない。
- (8)じだんだを踏んで泣いても泣くにもなら  
ない。
- (9)「由玉ですか何ですか?」とあの人人が問  
うたとき、「露ですよ」と答えて露の  
ように消えてしまつたかつたのになあ  
(そうすれば)